

可愛い可愛い僕の兄さん

数日前におそ松兄さんに呼ばれて博士の所へ行った僕が目にしたのは、随分と小柄になった長男の姿だった。

『動物になれるかもしれない薬』!？」

「そうダス」

「え…待って、それって飲んでも大丈夫なの？」

「それを調べる為の実験体ダス」

「思いつき実験体って言ってるよね!？」

慌てて博士に詰め寄れば、「これはおそ松くんも了解済みのバイトなんダス!」と言われて…え、バイト？

「…うっかりではなく？」

「そうダス」

「…騙して飲ませたのでもなく？」

「失礼ダス…」

「そおだよおチヨロ松う」

「っ!？」

急に足に掛かった重さと、いつもと同じ声。

sample

可愛い可愛い僕の兄さん

「なんつでお前はそう楽観的なんだよ！」

「この人、おれに愛さるゝ、土星」

僕とおそ松兄さんのネットカフェ活用法

「どうする？普通の席で隣同士とかにする？」

「俺わかんねーから任す！」

「んー…あ、この席って二人で使えましたっけ？DVD観れますよね？じゃあそこで」

伝票を受け取ったチョロ松に「いくよ」と言われてついていけば、ドリンクバーも連れていかれる。

「チョロちゃんよろしくう」「なんでだよ！自分でやれよ！」と言いながらも俺のコップに迷わず烏龍茶を入れてくれる素直じゃない弟が可愛い。

「なあなあ、漫画持つてっていいの？」

「いいけど…席まで来れる？先に場所見とかなくて平気？」

「お前俺のこと馬鹿にしすぎだろ…」

「あはは、ごめんごめん。じゃあ僕先に荷物置いてくるから…番号覚えた？あっちだからね？」

「わーかったってば！さっさとレイカのDVD準備しとけよ」

「レイカじゃなくてにやーちゃん！」

必死に言うチョロ松を置き去って漫画の棚へ行く。そう、今日はライブ帰りのチョロ松とまたまた会っただけだったんだけど、「さっき買ったDVD今すぐ見たい」というチョロ松にくつついて、二人してネットカフェに来たんだ。騒ぐなら家じゃねえの？って思ったけど、「とにかく早く見ただけ。兄さん別に来なくてもいいよ」とか可愛くないこと言いやがってあいつ。

sample

僕とおそ松兄さんのネットカフェ活用法

僕とおそ松兄さんのネットカフェ活用法

それにしても、こんな漫画あるんだな…うわ、すっげえたくさんある…あ、あの女の子可愛い。隣の列の棚の前に立って、じつと上の方を見上げている女の子。ふわふわの髪で頑張っておしゃべりしてるかんじのワンピースとか着ちゃってて。ちっさいなー、もしかして手が届かないとか？お手伝いますよーとか言って後ろから手え伸ばしてやったらときどきめかれちゃったりして！

そう思ってそっと近付こうとした瞬間、後ろから俺を追い抜いた男がその子の方に行って「どれ？」と聞いているのが聞こえる。なんだよ彼氏いるなら先に言えよ！

結局彼氏が上の方にあつた漫画を手に取り、女の子のほっぺにちゅーするところまで見てしまった。ふざけんなりア充！

イライラしながら他の棚へ行つて漫画を探す。ああくそ、あんなん見せられたせいで可読みないか全然わかんねえ…これでいいか…

適当に手に取った漫画をぺらぺら捲つていれば、突然後ろから俺の腹に腕が回される。

「うはっ!？」

「…兄さん、その声もうちよつとなんとかならない？」

「うっせえ余計なお世話だ！つーかお前何してっ…」

「何って…え、兄さん何持つてくんのかなーって」

「…見るのにわざわざ後ろから抱きつく必要あった？」

その言葉に俺の腹に回された腕に力が入る。こてんと俺の肩に頭をくつつけたチヨロ松から、「な

sample

「『『『『Look at me!!』』』』」

やることもなく昼寝でもするかと横になっていた昼下がり。末の弟がおそ松見さんもうちよつと有意義なことしなよお」と言うのに返事をするのも億劫で、だんまりを決め込んでいたその時。

「いつてきまーす」と遠くで小さく聞こえた気がした。

…あれ、今の声って。

「あれ？チヨロ出掛けるなんて言ってたっけ？」

「あ、やっぱチヨロ松兄さん言っていかなかったんだ」
居間に顔を覗かせた一松の言葉に「言ってくって何？」と聞けば、「チヨロ松兄さんの出掛けた先」と言いつつこたつに入ってくる。うん、待った。それさ、あいつ、俺がここに居るってわか

つてて、あえてそつと出て行つたってことだよな？
その行為を既に怪しんでいれば、「で、結局チヨロ松兄さんどこ行つたの？」と恐れを知らない末弟が一松に問いかける。

「…聞きたい？」

「んー、僕は勘付いてるんだけど、気付いてない人が一人いるからさあ」

「自分で言えばいいのに」

「やだよおめんどくさい」

のんびり話す第二人を見ながら、俺一人だけいらいらが募っていく。なんだよあいつ、なんか疾

sample

「「「「「Look at me!!」」」」」」

「「「「「Look at me!!」」」」」」

しいことでもしてんのかよ。

そう思っていれば、「なんかF6に呼ばれたから言ってくるって」という、特製の爆弾が放たれた。

「…はあああ!?なんで!?なんつでそういう大事なことお兄ちゃんに言わないのか!」

「内緒にしたかったんじゃない?ねえ一松兄さん」

「ヒヒツ…まあそんなとこじゃない?」

「くっそ今すぐ連れ戻しに」

腰を上げた瞬間、台所から顔を出した母さんに「どの松でもいいから買い物行って来てちょうだい」と声を掛けられる。咄嗟に逃げようとするものの、「すごいおそ松兄さん!よろしくね!」いつてらっしゃい」と当然のように言う二人と、「あら、それじゃあタイムセールのお卵お願いね」と平然と告げる母さん。

「いやでも…」と断ろうとすればギロリと睨まれて、とてもじゃないけれど行けないということもできず。

買い物を買わせて戻ってくれば、随分と時間が経ってしまった。

「仕方ねえ…迎え行くかあ…」

sample

これから知りたい君のこと

「あれ取りたいの？ちよつと待ってて！さっきあっちに踏み台あったから！」
その眩しい笑顔を見た時。僕があいつに恋した瞬間だった。

「チョロ松さんおかえりなさい」という声に反射で「ただいま」と返せば、「今日は良い本あったみたいですね」と言われてドキリとする。

「電話が何件か来てたみたいです。また会議終わってるのにいないんですか？」と言われてるんじゃないですか？」

「はあ…あれ、それ知ってることはトド松さん僕のところに来てたんですか？」

「そうでーす。仕事の依頼メールしましたよっていう確認と、よかったら飲みに行きませんか？つてお誘いだけだったんですけど」

「今日ですか？いいですよ」

「じゃあ十九時にいつもの店で」

そう言つてちらりと僕が手にしている本に目をやったトド松さん。少しだけ意地悪く笑った彼は、「今日は例のいいました？」と言ってくる。

「…今日はいませんでしたね」

「それは残念」

sample

これから知りたい君のこと

これから知りたい君のこと

「別に、良い本見つかりましたから」

「はいはい、そのへんの話はまた後で聞きますから」

手を振るトド松さんを見送って、小さくため息をつく。

…同期とはいえ、トド松さんに話したのは間違いだったかな。

ホワイトボードの自分の名前の所を書いてあった『会議中』という文字を消す。片手には会議資料と自分のノート、それからカバールの掛かった本が一冊。

自分のデスクに戻れば、会議に行く前に置いてあった電話メモの隣に、新たな電話メモが並んでいる。時計を見れば十五時半を回っていて、とりあえず急ぎのものから電話をしていこうと内容を確認する。

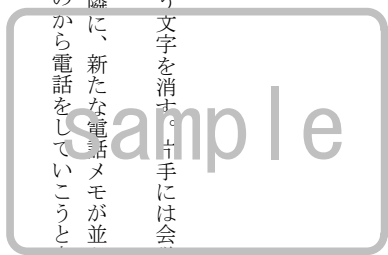
買ってきた本は、資料と一緒にデスクの上に。

その本を見れば、今日は会えなかったと残念な気持ちさがこみ上げてくるけれど…だめだ。集中しよう。本は電話が一段落したら、休憩の時に読もう。

そう心に決めて、整理した電話メモを手固定電話に手を伸ばした。

週末の定例会議。

金曜日の十三時に集合して、その週の成果と翌週の予定について話し合う。営業や企画など他の



僕と王子と夜会の秘密

「おそまつ！みてえ！」

「お！チヨロちゃん可愛くしてもらったなあ！」

「ぼくかわいい？」

「可愛い！すっげえ可愛い！」

「へへ…」

文字通り弾むような足取りで駆けて来たチヨロ松と、しゃがんで目線を合わせるふわふわの薄いグリーンのワンピース。このあたりはメイドが選んだんだろうな。つばの広い帽子には幅広のリボンがついていて、ご丁寧に顎の下で大きなちょうちんのようにふんわり結ばれている。さらに足元はブーツを合わせて、帽子にいつぱいくっついてる花は「おにわのおじちゃんにくれたの！」とのこと。うん、庭師よくやった。

本人もボリウムたっぷりのスカートがふわふわ揺れるのが嬉しいらしく、何度もくるくる回ったり飛び跳ねてスカートが広がるのを楽しむその姿が可愛らしい。

「みてみて！くるくる！」

「くるくるだねえ」

「おそまつみてえ！すごい！かわいい、わっ…」

「おっ、とお…！」



僕と王子と夜会の秘密

僕と王子と夜会の秘密

足がもつれて転びかけたチョロ松に手を伸ばして抱き寄せれば、勢いがつきすぎてそのまま二人で後ろに転んでしまう。盛大に尻もちをついて、ああこれ汚して怒られるやつかなあと思うけれど、とりあえず腕の中のチョロ松が守れたからよしとする。

綺麗に飾られた帽子は辛うじて結ばれたリボンで飛ばされることはなかったものの、背中にザリ落ちて飾られていた花はぼろぼろと落ちてしまった。せつかく綺麗だったのに、もったいないことしちゃったな。

頭を撫でながら「チョロ松、大丈夫だった？」と聞けば、なぜかみるみるうちにチョロ松の瞳に涙が溜まっていく。

「おそまつは、だいじょうぶ…？」

「ん、大丈夫だよ。チョロ松はどうか痛いとかない？」

「いたいとかない…」

それでも泣きそうになっているチョロ松に「なんでチョロ松泣くの？俺も悲しくなっちゃうよお？」と笑いながら言ってやれば、「だっておそまつ…おこられちゃう…」と言われて苦笑する。

「なんで怒られるの？」

「だって…おそまつおうじさまなのに…おようふく、つく…よぎ、しちやつたあ…」

「汚したの俺だから！チョロちゃん怒られないよ？」

「やあ…おそまつおこられるのやだあ…！」

sample